

コメの未来を東北から考える

産学有識者が討論

岩手大

岩手大学は2日、「コメの未来を東北から考える」と題したシンポジウムを盛岡市で開いた。三菱総合研究所の稲垣公雄研究理事、JA秋田ふるさと

の小田嶋契組合長、アイリスオーヤマの役員らが講演。米価の乱高下による混乱が広がる中、稲垣氏は「本当の危機はこれからの可能性がある」と指摘した。

シンポジウムはオンラインを併用し、260人余りが参加した。

稲垣氏は、これまでの米政策は一定に評価できるとする一方、ここ2年の米不足と米価急騰は「現行の政策が行き詰まったことの表れだ」と指摘。主食用米の需給を転作作物への助成で調整する手法に限界が来ているとした。農家の高齢化や離農が進んだことで生産基盤が弱まり、気象や天候の影響を受けやすくなったとも分析した。

は、6月末民間在庫量が250万トになる」と、相対取引価格は1万円を割り込むとい、放出した備蓄米は全量、早期に買い戻す必要がある」と強調した。

小田嶋組合長は、生産者の米価は小売価格から逆算されて決まる傾向があるとし、「需給の影響を最も受ける仕組みだ」と指摘。ニーズに合った生産などを通じ、価格交渉力の強化が重要だとした。



東北の情勢を踏まえて日本の米の将来について議論した

(2日、盛岡市で)

6月末民間在庫量と、産地と卸の相対取引価格が強い相関にあるといった試算結果も紹介。稲垣氏の試算で

日本農業新聞 令和8年9月3日(木) 全国3面

※この記事は日本農業新聞の許諾を得て転載しています。

※無断転載・複写を禁じます

アイリスオーヤマは田中伸生管理本部長が登壇。企業の農業参入がこれから欠かせないとして、2026年産から宮城県で始めた同社の米作りを紹介。東北を中心に「多くの自治体から、うちの地域にも参入してほしいと声かけがある」と説明した。(鈴木雄太)